

## 彼岸花

浜田 道雄

千歳通りの植え込みに、彼岸花が点々と群れをなして咲いているのを見つけた。気づいてみれば、今日は「彼岸の中日」。『咲くべきとき』を忘れずに花を開いた彼岸花を見て心おぼしいだが、それにしてはどうしてこの花は「いまが彼岸」と知ったのだろう。

今年の夏はこのほか暑く、九月になっても夏の暑さがつづいて、私たちの季節感をずいぶん狂わせた。なのに彼岸花は律儀にも『咲くとき』を間違えない。なにか私たちの知らない季節の移ろいを感じする力をもっているのだろうか。不思議に思うとともに、墓地の墓石の影などに咲くこともあるこの花になにか不気味なものを覚えぬでもでもない。

彼岸花は地面からすつと何本かの花茎を伸ばして、その先端に鮮やかな朱色の花弁を広げ咲き誇る。葉が出るのは花が終わったあとだ。ひとところに数本の花茎がまとまっているから、道端の茂みはそこだけが場違いに艶やかに激しく燃え上がるように輝く。

相模の大山の麓にある日向薬師は彼岸花の名所で、この時期になると境内には彼岸花が群生して咲き誇り、それを楽しむ多くの人で賑わう。近くのゆるやかに傾斜した田畑の畦道にもたくさん彼岸花が段をなして咲くので、あたりには明るく華やかな景色がひろがる。

鶴巻温泉の丘の上に暮らしていたころ、家内とこの季節になると稲刈りの済んだ田んぼの畔に列をなして咲き誇る彼岸花を眺めて楽しんだものだった。変種の「白い彼岸花」の球根をもらって庭に植えて楽しんだこともある。

この世田谷の街も、半世紀ほど前まではあちこちに農村の名残がみられるのどかな東京の郊外だった。いつのまにか住宅が密集し、車が激しく往来する市街地に取り込まれてしまったが、そのころにはいま千歳通りに咲く彼岸花の親たちが、あちこちの田畑のまわりや畔で大きな顔をして咲き競っていた。それを思うと、この道端のわずかな緑地で元気に咲く彼らの子孫たちの力強い姿は頼もしくみえる。

彼岸花は日本では季節になればどこでも見られる花だが、もとは中国原産の三倍体植物だから種子を作らない。人の手を介さなければ分布を広げることはできないのだから、この花の咲くところには必ず人の生活があったと考えていい。彼岸花の球根には毒があるテンポンも多いから、昔の人たちは飢饉のときの救荒食として田畑の周りに植えたとも、畔を荒らす野ネズミを駆除するために植えたともいわれている。

遠い昔大陸から日本にやってきた弥生の人たちは、コメとともに彼岸花の球根をもって海をわたってきたのだろうか。そんな花の歴史に思いを馳せながら、道端の彼岸花をみつめる。